



熊本の今を知るなら…

RKK ニュースキャッチャー

月～金 午後6時30分

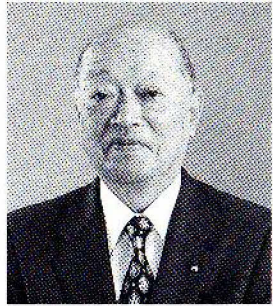
- キャスター
二子石隆一
藤井 晶
- スポーツキャスター
木村 和也
小林 明弘
- お天気キャスター
本田キヨミ

RKK熊本放送

第38回
熊本県芸術祭参加

ベートーヴェン
第九
第14回

平成8年12月23日(月)午後6時30分
熊本県立劇場コンサートホール
主催／熊本県民第九の会・熊本県文化協会
助成／熊本県・(財)熊本県立劇場



熊本県知事
福島 譲 二

祝 辞

第14回ベートーヴェン「第九」演奏会を開催を心からお喜び申し上げます。

今年も多彩なゲストを迎え、一年間の熊本音楽活動を締めくくりにふさわしい県民の皆様方によるコンサートの幕が上がります。

熊本県民第九の会の皆様方の熱意によって生まれ、育てられてきたこの演奏会は、年末恒例の一大祭典にまで成長してきました。関係者の皆様方のこれまでの御尽力に対し深く敬意を表します。

本日御出演の皆様は、熊本交響楽団の方々、合唱の募集に応募された方々が中心であり、ほとんどはアマチュアの方々です。夏の暑い頃から重ねてこられた練習の成果を十分に発揮され、すばらしい演奏と歌声を聞かせていただけることを期待しております。

本日の御盛會を心から祈念いたします。



熊本県立劇場館長
鈴木 健 二

「だいく」は永遠に「だいく」

放送局の仕事を離れて丸八年になりますが、この僅かの間にも言葉が大きく揺れているのがわかります。それが良い方向にならば構いませんが、首をかしげる場合も多いのです。

その一つが「七」はすべて「なな」であり、「九」はほとんど「きゅう」と言うのです。

「昭和十九年、南方の戦場では……」を、「じゅうくねん」と発音すれば、戦争の淋しさが浮かんでくるのに、「じゅうきゅうねん」と読むので、「きゅう」が強く聞こえ、戦う意志がより大きく響いてしまうのです。

しかし、さすがにベートーヴェンの「第九交響曲」は優しく「だいく」と言っています。もしこれを「だいきゅう」とでも紹介したらあの合唱は輝きを失ってしまいます。

「だいく」はいつまでも「だいく」であって欲しいのです。その優しさを演出するのは、舞台に立たれたオーケストラと合唱団の皆さんの心です。

どうか第九を永遠に「だいく」で……。



熊本県文化協会会長
三浦 洋 一

ご挨拶

県民第九の会の第14回公演を心からお慶び申し上げます。

人びとの魂を揺さぶらずにはおかない斉唱を聴くたびに、私は医学生の頃友人の家のレコードで初めて「第九」を聞いたときのことを思い出します。

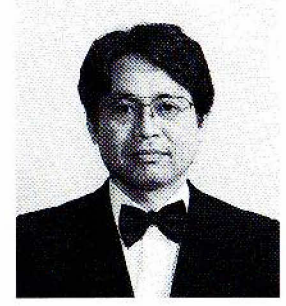
ノモンハン事件が起こる直前の重苦しい時代の空気のなかで、たたみかけるような歌の大きな力は私を鼓舞し、感動をよびおこしてくれました。

熊本は有馬俊一さんが第一高校の合唱指導をされた頃から今日まで高校生、主婦のグループが何度も全国制覇をとげて合唱王国といわれるようになりました。社会人のグループの活動も目立っています。

今回の「第九」の指揮は本名徹二さん。独唱者には河添富士子、妻鳥純子、人間知覚、瀬戸口浩の皆さんが出演されます。

今年の熊本は'96くまもと漱石博、第9回県民文化祭、更に「お城まつり」も加わって質量ともに圧倒的な文化活動がくりひろげられてきました。

その棹尾を飾るにふさわしいベートーヴェン「第九」演奏会が盛り多かつた年のグランドファイナルになることを期待し、県民の皆さんと共に盛んな声援と拍手を贈ります。



熊本県民第九の会実行委員長
林 原 隆 治

ご挨拶

ご来場、誠に有難うございます。今年も14回目の「第九」演奏会を開催できますことを、心より御礼申し上げます。

今回は指揮者に高い音楽性を備えられた新進気鋭の本名徹二氏をお迎えし、ソリストにも熊本県出身の河添さんをはじめ素晴らしい経歴の方々をお願いすることができまして、例年通り本格的な第九を演奏できますことを大変喜んでおります。

一言で年末恒例と申しますが、熊本県立劇場完成を祝して始まったこの演奏会も、当時とは様々な面で環境が変化し運営が難しくなっています。実行委員の皆さんの献身的な活動によって何とか継続されているのが実情です。しかしながら、毎年会場を満席にして頂いております県民の皆様と、公募による300名の合唱団員並びに郷土が誇る熊本交響楽団団員の皆さんの「第九」への希求によって、本日まで頑張ってきたと申せましょう。今後とも皆様のご支援を心からお願い申し上げます。

末筆になりましたが、本公演に際し、熊本県・県立劇場並びに県文化協会のご助力を頂きましたことを深く御礼申し上げます。

指 揮 本 名 徹 二
 独 唱 ソ プ ラ ノ 河 添 富 士 子
 メゾ・ソプラノ 妻 鳥 純 子
 テ ノ ー ル 大 間 知 覚
 バ リ ト ン 瀬 戸 口 浩

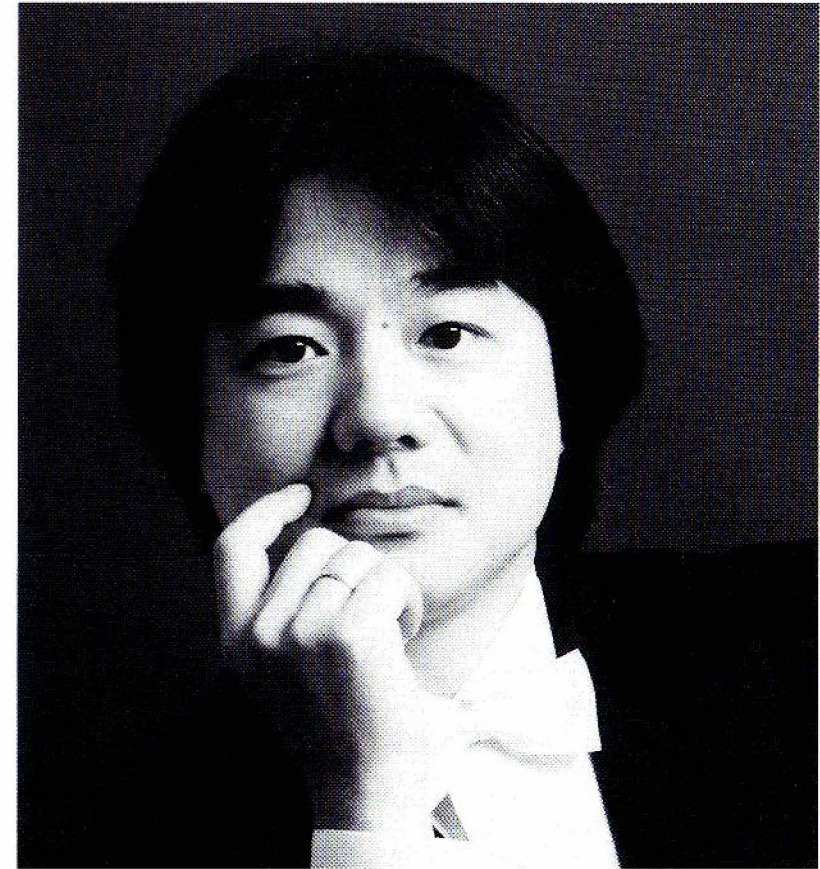
合 唱 熊 本 県 民 第 九 の 会 合 唱 団

合唱指揮 林 原 隆 治
 工 藤 勇 吉
 松 岡 聡
 ピアノ 古 閑 恵 美
 眞 田 眞 澄
 浜 田 志 貴

管 弦 楽 熊 本 交 響 楽 団



平成 7 年 12 月 24 日 (日) 《第 13 回 熊 本 県 民 第 九 の 会 演 奏 会 (指 揮 = 金 洪 才)》 从 中



指 揮 本 名 徹 二 (ほんな てつじ)

郡山市生まれ。1981年東京芸術大学器楽科中退。井上道義、山田一雄各氏に師事。芸人在学中より指揮活動開始。1980年～89年仙台フィル(旧・宮城フィル)指揮者。1985年東京国際音楽コンクール指揮部門にて最高位受賞。1990年アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクールにて第2位受賞。1992年ハンガリー・ブダペスト国際指揮者コンクールにて第1位とバルトーク賞受賞。1994年村松賞受賞。プラハ放送交響楽団定期公演や東京公演等を指揮。1995年第5回新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞受賞。また、文化庁芸術選奨・文部大臣新人賞受賞。ハンガリー国立交響楽団の東京公演等を指揮。1989年よりアムステルダムにて3年間、また95～96年にかけてロンドンにて研修。これまでに、ケルンテンの夏音楽祭、国際バルトークフェスティバル、東急文化村・モーストリー・モーツァルト音楽祭、ICMC国際コンピューター音楽会議等に出演。また、1997年には『ブダペストの春』音楽祭、オランダ・ミュージック・セッション10周年記念音楽祭に出演予定。M. アルゲリッチ、小林道夫、E. レオンスカヤ、リカド、カツァリス、江藤俊哉、メネセス等、たくさんのソリストたちと共演。1996年～99年まで、東京・ムジカーザにて、19世紀末ウィーンのカフェから生まれた音楽シリーズをプロデュース。現在、大阪シンフォニカー常任指揮者、ジャパン・チェンバー・オーケストラ指揮者。

河添富士子 (かわそえ ふじこ)
ソプラノ

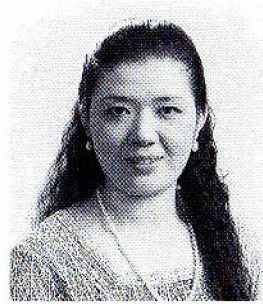


1980年熊本県立高等学校卒業。同年国立音楽大学入学、1981年東京芸術大学音楽学部声楽科入学。1987年同大学院音楽研究科(オペラ専攻)修了。

第32回芸人オペラ「フィガロの結婚」(モーツァルト)の伯爵夫人を演じ、オペラデビュー。台東区、取手市主催による「第九」(ベートーヴェン)のソリストを務める。

1988年度東京文化会館推薦音楽会オーディションに合格、同会館主催新進音楽家デビューコンサートに出演。1990年2月サントリーホールでのトヨタ・コミュニケーションコンサート200回記念メンデルスゾーンのアラトリオ「エリア」(指揮/クルト・レーデル)、東京文化会館主催「ネルソン・ミサ」(ハイドン)、「Vesperare solennes de confessor」(モーツァルト)、「レクイエム」(フォーレ)等のソリストを務める等、各地で活躍している。これまでに、岩津範和、岩津整明、三浦久美子、曾我栄子、故 藤枝昭俊、故 木村宏子各氏に師事。二期会会員。

妻鳥 純子 (めんどり すみこ)
アルト



大分県立芸術短期大学卒業。東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修了。

第42回日本音楽コンクール第3位、海外派遣コンクール松下賞受賞。

ミュンヘン音楽大学に留学。藤原武、首藤迪子、ロドルフォ・リッチ、中山梯一、フランツ・ミクサ、ヘルタ・テッパーの諸氏に師事。

オペラ「カルメン」、「フィガロの結婚」、「修道女アンジェリカ」、「ヴァニキュレ」、「神々の黄昏」に出演。「第九」、「メサイア」等のコンサートに数多く出演する一方ドイツリートを中心にしたプログラムでリサイタルを行っている。'92年、'95年に宮本亜門演出の東宝ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」に修道院長の役で出演。好評を得る。

'96年より友人4人とグループ「Fünf Musikanten」(5人の音楽愛好家)を結成し、1月に「ブラームス歌曲の夕べ」、6月に「シューマン歌曲の夕べ」を開催し大変好評を得ている。'97年1月31日「シューベルト歌曲の夕べ」を音楽の友ホール、3月28日愛媛県西条市総合文化会館大ホールにて「にほんのうた、ドイツのうた」一妻鳥純子と素敵な仲間たち一開催予定。

現在、玉川大学、武蔵野音楽大学非常勤講師。二期会会員 日本フーゴ・ヴォルフ協会同人。

大間知 覚 (おおまち さとる)
テノール



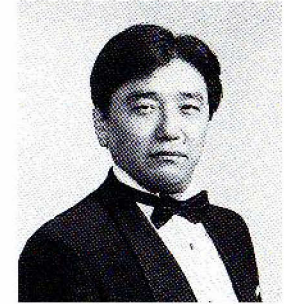
国立音楽大学声楽科卒業。同大学院オペラ科を修了。伊藤京子、田口興輔の両氏に師事。

1992年より、イタリア「ジュゼッペ・ヴェルディ国立音楽院」に留学。フランコ・リッチアルディ、フェランド・フェッラーリの各氏に師事。1993年には、文化庁国内研修員に推薦され、研修を積む。1991年、「イタリア声楽コンクール」に於いて、第一位「ミラノ大賞」を受賞。二期会修了時に「優秀賞」を受賞し、会員に推薦される。

1993年に帰国後、二期会オペラ、ブッチーニ「三部作」 「ジャンニ・スキッキ」のリヌッチョ役にてデビューを果たす。その後、「魔笛」のタミーノ、「ラ・ボエーム」のロドルフォ、「カルメン」のホセ、「トスカ」のカヴァラドッシ、「蝶々夫人」のピンカートン等、数々の二期会公演の主演を演じ、いずれも好評を博す。また、今年3月には、世界初演「三せう大夫」の二郎役に、5月には「イタリア・オペラ」 「ヴェルディの祭典」に出演し、成功を収める。来年に於いては、2月に行われる二期会オペラ公演「カヴァレリア・ルスティカーナ」のトリリッドゥ、また、11月に行われる第二国立劇場公演オペラ「タケル」に出演が決まっている。

コンサートに於いては、ベートーベンの「第九」を初め、モーツァルトの「レクイエム」J・バッハの「カンタータ」、「受難曲」、シューベルトの「ミサ曲」等のソリストとしても活躍している。次世代を担う二期会新進テノールとして、注目、期待されている。二期会会員。

瀬戸口 浩 (せとぐち ひろし)
バリトン



東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修了。安宅賞受賞、読売新人演奏会出演、第26回文化放送音楽賞受賞。池端ミチ子、森園千廣、R. リッチに師事。他にG. スゼー、G. ステファノー、C. ベルゴンツィ等にも指導を受けている。今年9月もウィーンで、W. ベリー氏に指導を受けたばかりである。「フィガロの結婚」「魔笛」「コシ・ファン・トゥッテ」「カルメン」「こもり」「チャールダッシュの女王」「ラ・ボエーム」「蝶々夫人」「椿姫」「リゴレット」「ボッカチオ」を始めとして数多くのオペラに出演。演奏会でも、ベートーヴェン「第九」の他に、バッハ、ヘンデル、モーツァルト、ハイドン、シューベルト、フォーレ宗教曲や、ショスターコヴィッチ、オルフ、マーラーの作品を新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団等と共演している。今年、1月には鹿児島混声合唱団のイタリア・ナポリ公演にソリストとして同行、数曲を独唱、絶賛を浴びる。現在、鹿児島オペラ協会会員、鹿児島混声合唱団ヴォイストレーナー。

1. カンタータ第147番より
コラール“主よ、人の望みの喜びよ” BWV147
J. S. バッハ

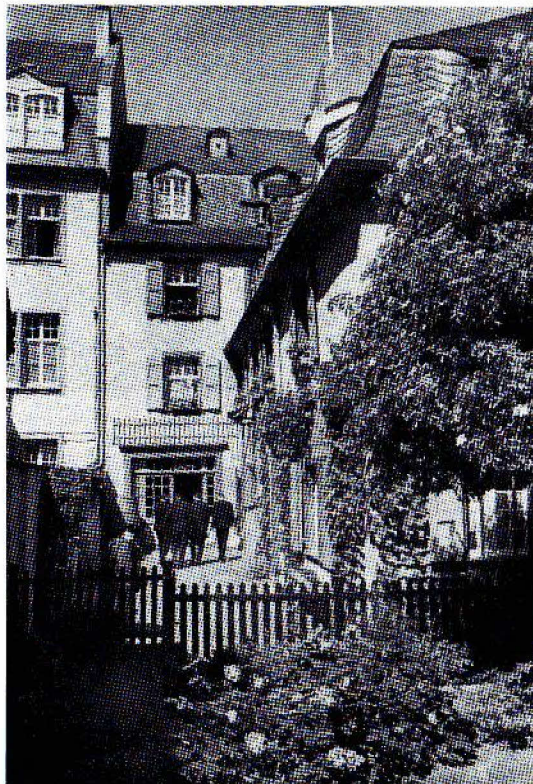
2. 交響曲第9番 二短調 作品125「合唱付き」
ベートーヴェン

- 第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco maestoso
第2楽章 Molto vivace
第3楽章 Adagio molto e cantabile
第4楽章 Finale

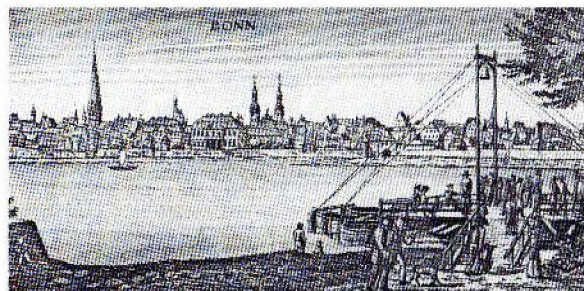
ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げて、窓辺に外へ向かってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子は、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持ちと愛する気持ちが手にとるようになる。



ベートーヴェンの生家（ボン）



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景 1800年頃

■シラー＝《歓喜に寄す》

対訳＝大宮 真琴

O Freunde, nicht diese Töne! sondern
lasst uns angenehmere anstimmen, und
freudenvollere.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを
ともに歌おう!

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuer-trunken,
Himmliche, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt,

バリトン独唱・合唱

①歓びよ、神々のうるわしい譚きよ!
楽園の娘らよ!
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう!
②この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

Wem der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja, Wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund!

四重唱・合唱

③大なる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情をから得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
歓びの歌を、ともに歌え!
④しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば!
だが、それさえ持つことのできなかつた者は、
返しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい!

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Eien Freund. geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

四重唱・合唱

⑤すべてこの世に在るものら、
自然の胸から歓びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
歓びの薔薇の小径を行く。
⑥歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルビムは、神の御前に立つ。

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

テノール独唱・男声合唱

⑦歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、
壮大な人の軌道をたのしく飛びかうように、
⑧同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

Seid umschlungen Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder über'm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such'ihn über'm Sternenzelt!
Über Sternen muss er wohnen.

合唱

⑨たがいに手を取り合おう、億万の人々よ!
この口づけを、全世界にあたえよう!
同朋（はらから）よ、星のかなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
⑩ひれ伏して祈るか? 億万の人々よ、
創り主を心に感ずるか? 世界の民よ、
星空のかなたに、主をさがし求めよう!
星たちのうえに、主は住み給うのだ!

1. カンタータ第147番より
コラール「主よ、人の望みの喜びよ」BWV.147
J. S. バッハ

J. S. バッハは生涯で約300曲の教会カンタータと数十曲の世俗カンタータを残した。古くはミュールハウゼン時代からワイマール時代、ゲーテン時代を経てライプツィヒ時代に入り、没年からさかのぼること15年、ほぼ1735年頃に至るまで、バッハのカンタータ創作の発展が跡付けられるのである。バッハのカンタータは、オルガン作品とならんでバッハ芸術の真髄にふれる重要な作品であり、ここにバッハのすべてがあるといえよう。

バッハのカンタータ創作の黄金期はライプツィヒ時代に訪れる。トマス・カントルという地位を得たバッハは、毎日曜の礼拝式を、ほとんど自作のカンタータで飾ろうと志し、そして1723年5月30日三位一体節後第一日曜日から、その計画を実行に移したのである。もちろん、ワイマール時代に作曲したものも手を加えることによって再演した。ライプツィヒ時代のカンタータの音楽的特色として、全体のパターンは確立してはいるものの、個々においてきわめて多彩な可能性の追求が見られる。

この第147番のカンタータ「心と口と行いと生活で」は、全二部で10曲からなる大作であるが、聖母マリア御訪問の祝日にふさわしく、トランペットとオーボエをまじえたオーケストラが全曲に明るく、すべてにみずみずしい美しさがあふれ、神の子をみごもったマリアの喜びがしみじみと伝わってくるような音楽に祝祭的な色彩を与えている。「主よ、人の望みの喜びよ」の名で親しまれているコラールが第6曲と第10曲に登場するため、我が国でも愛好者の多いカンタータである。

コラール「主よ、人の望みの喜びよ」は、マイラ・ヘスのピアノ編曲で広く知られるようになったもので、英訳名「Jesus, Joy of Man's Desiring」からとられたものである。因にドイツ語による原題は「イエスを有するわが喜び Wohl mir, dass ich Jesum habe」となっている。

あの心を静めるような弦楽器のリトルネロに続き、コラールが一行一行簡素な四声体で歌われてゆく。リトルネロの主題の三連符音形は、ときには伴奏として、そしてときには間奏として用いられ、再び弦楽のみによるリトルネロで曲をとじる。

2. 交響曲第9番二短調作品125「合唱付き」
ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ボンのフィッシェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいざいざ、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルントナート劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、いく違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

【第一章】 Allegro ma non troppo, un poco
maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として沸き起る巨大な魂のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異なって、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、とどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題へ壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びをかち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

【第二章】 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えるうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果たすことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶醉や麻酔へと駆りたてられるからである…」と言っている。

【第三章】 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴する

ような明るく美しい第二主題、この向主題にもづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせていくことか、思い出がつとに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」と言っている。

【第四章】 Finale

第1呈示部—まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの軟ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返ししながら全合奏に至る。

第2呈示部—この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部—やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組み合わせられて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ—曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかざりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「熊本県民第九の会」実行委員会

| | | | | | |
|-----|------|----|------|-----|----|
| 顧問 | 有馬俊一 | 委員 | 神田一伸 | 黒葛原 | 潔 |
| | 下田宰城 | | 草刈秀克 | 本山 | 洋 |
| 委員長 | 林原隆治 | | 草刈秀士 | 山崎 | 崇伸 |
| | | | 田北洋康 | | |

〈コンサートマスター〉

鶴 和美

〈1stヴァイオリン〉

東 恭子
内 田 衣伊子
桂 敦子
古 泉 晃子
陶 山 典明
黒葛原 契子
鶴 和美
鶴 千春
長 坂 浩子
中 山 文子
藤 本 佳 澄
松 岡 千 平
松 本 由紀子
山 下 史

〈2ndヴァイオリン〉

岩 下 史
浦 上 郁 子
岡 純 子
交 野 雅 代
小 柳 敦 子
清 田 みずほ
迫 田 美 和
佐 藤 弘 美
園 村 明 美
高 木 信 雄
黒葛原 陽子
長 野 衣里子
野 原 万友美
織 川 明 子
東 真知子
平 野 貞 子
古 屋 弓 子
本 山 洋
柚 原 三弥子

〈ヴィオラ〉

池 辺 京 子
上 野 久 美
植 木 廣 伸
緒 方 進
緒 方 肇
北 洋 孝 治
清 元 晃
甲 田 啓 子
黒葛原 潔
土 井 智 広
徳 永 義 治
中 村 衣井子
野 尻 晃 一
山 崎 崇 伸
吉 田 美智子
鷲 山 法 雲

〈チェロ〉

石 垣 博 志
樋 田 博 文
長 尾 和 治
永 倉 照 忠
長 坂 輝 喜
野 島 秀 司
佛 淵 かつよ
佛 淵 信 夫
本 田 義 信
三 浦 純 子
石 田 晴 久
水 原 真 純
山 中 朗 史

〈コントラバス〉

東 康 二
飯 尾 昌 和
北 村 博 之
古 泉 俊 彦
国 米 稔
坂 田 英津子
重 田 まゆみ
田 上 博 子
歳 田 和 彦
中 川 裕 司

〈フルート〉

今 村 ナオミ
小 嶋 恵美子
外 岡 紀 子
山 口 邦 子

〈オーボエ〉

片 岡 久 哉
釘 沢 秀 雄
辰 野 裕 昭
吉 田 千 草
黒 木 健 二
高 野 栄 次
府 高 明 子
前 野 美千代

〈クラリネット〉

黒 木 健 二
高 野 栄 次
府 高 明 子
前 野 美千代

〈ファゴット〉

小 田 穂 積
小 林 太 郎
高 木 群 之
星 出 和 裕

〈ホルン〉

上 野 竜 志
小 島 允
田 中 禎 子
安 松 貞 司
山 口 亮 二

〈トランペット〉

豊 田 恭 司
永 廣 正 治
堀 江 幸 司

〈トロンボーン〉

小 多 崇
寺 本 昌 弘
服 部 秀 人

〈打楽器〉

白 尾 友 宏
田 中 里 香
早 川 武 志
山 中 美 雪

第1回 昭和57年12月28日(火)

指揮 山田 一雄
独唱 新 圭子 木村 宏子 伊津野 修 高橋 修一
※越 天 楽(雅楽)……………近 衛 秀 磨(編曲)

第2回 昭和58年12月11日(日)

指揮 大友 直人
独唱 高見久美子 岡 ますみ 入野 光彦 柴田 啓介
※歌劇「ニルンベルグのマイスターシンガー」前奏曲……………ワーグナー

第3回 昭和59年12月27日(木)

指揮 山岡 重信
独唱 中沢 柱 木村 宏子 板橋 勝 池田 直樹
※弦楽のためのアダージョ 作品11……………バーバー

第4回 昭和60年12月25日(木)

指揮 フランティシエック・ワイナル
独唱 三縄みどり 妻鳥 純子 伊達 英二 中村 邦男
※「レオノーレ」序曲第3番 作品72……………ベートーヴェン

第5回 昭和61年12月27日(火)

指揮 荒谷 俊治
独唱 津下美奈子 木村 宏子 鈴木 寛一 芳野 康夫
※トッカータとフーガ 二短調……………バット〜ストコフスキー

第6回 昭和62年12月26日(土)

指揮 安永武一郎
独唱 中沢 柱 木村 宏子 近藤 伸政 栗林 義信
※「エグモント」序曲 作品84……………ベートーヴェン

第7回 昭和63年12月25日(日)

指揮 安永武一郎
独唱 三縄みどり 木村 宏子 鈴木 寛一 平野 忠彦
※「コリオラン」序曲八短調 作品62……………ベートーヴェン

第8回 平成元年12月24日(日)

指揮 小松 一彦
独唱 秋山恵美子 木村 宏子 成田 勝美 高橋 啓三
※「プロメテウスの創造物」序曲 作品43……………ベートーヴェン

第9回 平成2年12月23日(日)

指揮 糴山 和明
独唱 山田 綾子 木村 宏子 大野 徹也 福島 明也
※「ロザムンデ」序曲 作品26 D797……………シューベルト

第10回 平成3年12月23日(月)

指揮 安永武一郎
独唱 西森 由美 木村 宏子 田中 誠 宮原 昭吾
※「エグモント」序曲 作品84……………ベートーヴェン

第11回 平成5年12月23日(木)

指揮 荒谷 俊治
独唱 河添富士子 春日 成子 小林 彰英 栗林 義信
※歌劇「ニルンベルグのマイスターシンガー」前奏曲……………ワーグナー

第12回 平成6年12月25日(日)

指揮 金 洪才
独唱 岩永 圭子 妻鳥 純子 饗庭 知昭 勝部 太
※「エグモント」序曲 作品84……………ベートーヴェン

第13回 平成7年12月24日(日)

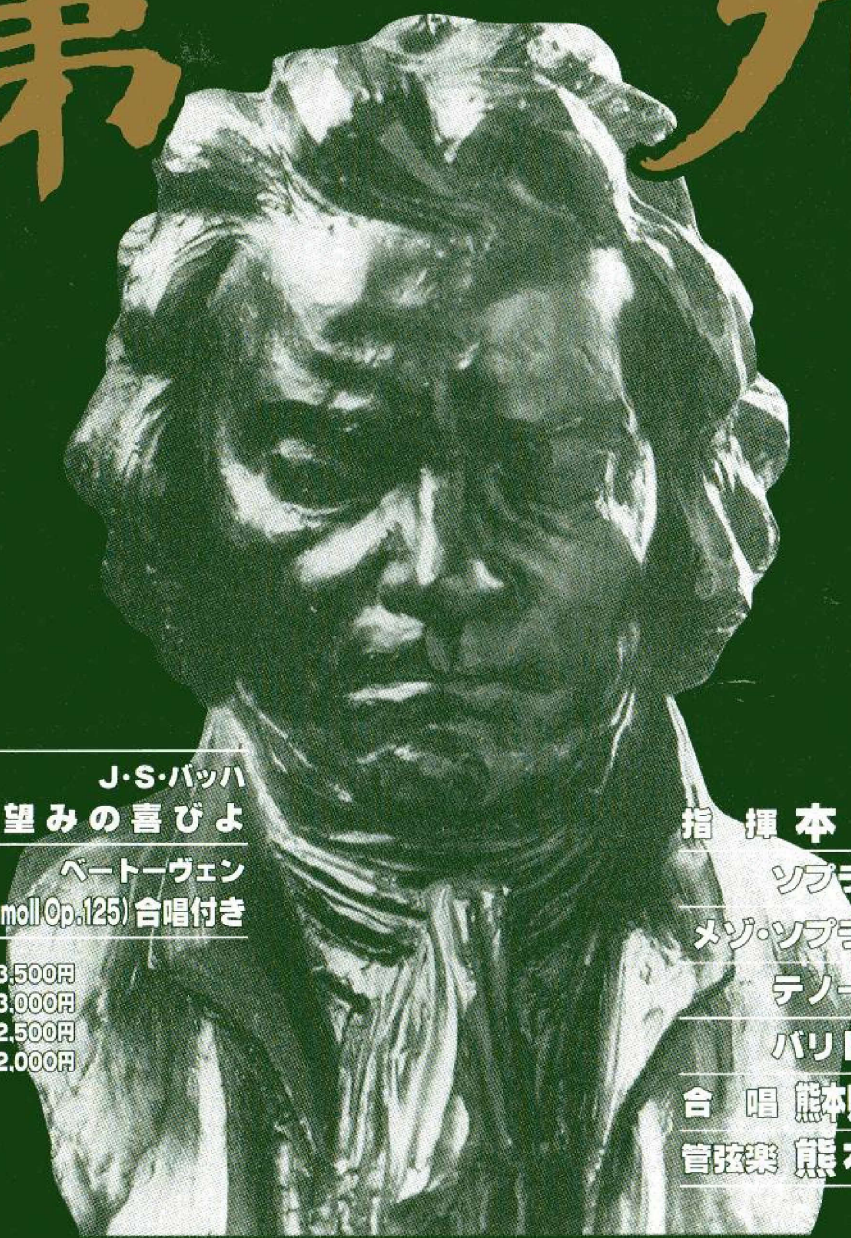
指揮 金 洪才
独唱 西森 由美 妻鳥 純子 大島 博 大島 幾雄
※モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」K. 618……………モーツァルト

第38回
熊本県芸術祭参加

(第14回)

ベートーヴェン

第九



曲目

J・S・バッハ
主よ、人の望みの喜びよ
ベートーヴェン
交響曲第九番 (d.moll Op.125) 合唱付き

S 席 (1階指定席) 3,500円
A 席 (1階指定席) 3,000円
B 席 (1階自由席・2階指定席) 2,500円
C 席 (3階自由席) 2,000円

指揮 本名 徹二
ソプラノ 河添富士子
メゾ・ソプラノ 妻鳥 純子
テノール 大間知 寛
バリトン 瀬戸口 浩
合唱 熊本県民第九の会合唱団
管弦楽 熊本交響楽団

12/23(月)午後6時30分開演
熊本県立劇場コンサートホール

- 主催/熊本県民第九の会・熊本県文化協会
- 助成/熊本県・(財)熊本県立劇場
- 入場券は、11月4日より県立劇場および市内各プレイガイドにて発売します。
(KNサービス・熊本交通センター・西野楽器・熊本県立劇場)
- お問い合わせ先/熊本県民第九の会事務局 ☎096(345)7285